

「人」からみた『外交時報』

：『外交時報総目次・執筆者索引―戦前編』（日本図書センター、2008）の編纂を通じて

報告者：伊藤信哉（松山大学法学部准教授）

1. はじめに

- ◇ 20世紀前半における『外交時報』＝日本の「外交論壇」の中心的存在
- ◇ 1898年2月に創刊され、1945年4月の休刊までに111巻956号を発行
cf. 戦後は第1期：950号(1952.11)－952号(1953.1)
第2期：953号(1958.8)－1233号(1986.3)
第3期：1234号(1987.1)－1351号(1998.9)
- ◇ 1930年の『外交時報』／月2回刊・5,322頁→類似誌を凌駕、総合雑誌すら上廻る
cf. 2000年の類似誌：『国際問題』12号1,072頁／『世界週報』49号3,968頁
- ◇ 他方、同誌の詳細については、今日ではほとんど知られていない
→ 出版社（外交時報社）そのものの流転・衰微が大きな原因
- ◇ 発表の趣旨：目録編纂に当り、同誌に関して判明したことを「人」の面から報告する

2. 歴代の経営者

(1) 有賀長雄（創刊者：1898.2～1911.10：1巻1号～14巻167号）

- ◇ 1860年生れ。82年に東大文学部を卒業、84年に東京専門学校講師となる
→ 国際法、国法学、外交史などを担当（日本における外交史学の祖のひとり）
- ◇ 1898年に東京専門学校内に「外交時報社」を置き、38歳から51歳まで、当初はほぼ独力で雑誌を編集・経営
- ◇ 当時の外交時報は「学術誌」としての性格が強いが、当時の時代背景から、海外報道や解説にも力を入れている
- ◇ 健康問題および外交時報社の経営不振により、同社を手放した
- ◇ 国際法と外交史のみならず、国法学や行政学、社会学など多方面で歴大な業績を残す
- ◇ 早稲田大学草創期における重要な貢献者の一人であるが、その後の経緯から、早稲田では無視されることが多い…その「全体像」を捉えた研究も存在しない

(2) 大庭景秋 (第2代：1911.11～1914.4：14巻168号～19巻227号)

- ◇1872年生れ。早くに両親と死別し、学校に抛らずにロシア語などを習得
- ◇1906年～1911年に大阪毎日・東京日日にて活躍したジャーナリスト
- ◇『外交時報』を「学術誌」から「報道誌」に変えようとした形跡がみられる
→論説の無署名化や海外通信員制度の創設など
- ◇上記の改革は失敗したとみられ、経営不振を脱することができないまま退陣。ただし後述の稲原勝治に代表されるジャーナリストを執筆陣に呼込んだのは、重要な貢献
- ◇その後、東京朝日新聞を経て読売に移り、革命後のロシアに赴いたまま消息を絶つ

(3) 上原好雄 (第3代：1914.5～1920.12：19巻228号～32巻387号)

- ◇1883年生れ。早大で学んだのち野戦鉄道提理部や、日本電報通信社で働く
- ◇軍事関係の出版に興味を持っていた人物らしい(同社も出版事業に進出している)
- ◇1915年春から神川彦松、1918年ごろから半沢玉城に編輯を任せていたと推測される
- ◇この時期から、現役の外交官や政治家の寄稿が本格的に始まる
- ◇1920年4月に半沢が編輯人となる…同年末ごろに経営譲渡か(経緯は不詳)

(4) 半沢玉城 (第4代：1921.1～1943.12：33巻388号～108巻936号)

- ◇1887年生れ。日大を卒業したあと東京日日新聞記者を経て、やまと新聞編輯局長
- ◇1918年に神川彦松が留学したため、後任として外交時報社に招かれたと推定される
- ◇『外交時報』編輯人に就任したころから同誌に有力政治家が寄稿し始める。また社長就任後、軍人の寄稿も始まる
→『外交時報』を学術・評論・報道の三つの側面を兼備した雑誌として大きく発展
- ◇平均ページ数も127ページ(1921年)→230ページ台(1930年代)と増加
- ◇1930年代半ばに、本社を丸ノ内(帝国劇場の斜向い)に移転するなど経営も順調

(5) 小室誠 (第5代：1943.12～1945.4：108巻937号～111巻956号)

- ◇1896年生れ。早大を卒業したあと、報知新聞論説委員を経て1941年ごろ入社
→従来と異り、半沢も社内にとどまった模様(戦後、社長に復帰している)
- ◇戦時中の用紙制限などで、どんどん誌面が縮小された時期にあたる
- ◇1945年4月号を最後に、予告なく休刊(5月下旬の空襲による罹災か)。

3. 常連寄稿者たち

- ◇投稿数が数十編に達する「常連寄稿者」でありながら、これまでほとんど分析されてこなかった人物が少なくない
- ◇半沢玉城も多数の論稿を発表したが（約 400 篇）、彼に関しても、1920 年代について岡本俊平と五味俊樹による分析がある（細谷千博・齋藤眞編『ワシントン体制と日米関係』および長谷川雄一編『大正期日本のアメリカ認識』）のみで、30 年代以降はほぼ手つかずの状態

(1) 稲原勝治（いなはら・かつじ）

- ◇1880 年生れ。1907 年スタンフォード、続いてハーバード大学を卒え 1911 年に帰国
- ◇大庭の紹介により 1913 年に大阪朝日新聞社に入社。のち同社の初代外報部長となるが、白虹事件で退社し、読売新聞を経て東京日日新聞に転じている
- ◇『外交時報』には 1911 年から 1944 年の間に 230 編を発表しており、当時を代表する外交評論家のひとりであるが、これまでほとんど研究されたことがない

(2) 米田實（まいだ・みのる）

- ◇1878 年生れ。オレゴン州立大学とアイオワ州立大学大学院を卒業し、1907 年に帰国
- ◇1908 年に東京朝日新聞に入社し、1911 年には同社の初代外報部長となる。稲原とは異なり、学者としても活動しており、明治大学政治経済学部教授（外交史）も務めた
- ◇『外交時報』には 1913 年から 1945 年の間に合計 202 編を寄稿している
- ◇彼についての先行研究としては拙稿「国際問題評論家の先駆・米田實」などがあり、今後、さらに分析を深めていく予定

(3) 末広重雄（すえひろ・しげお）

- ◇1874 年、末広重恭（鉄腸）の長男として生れる
- ◇東京帝大法科を 1899 年に卒業し、1902 年に京都帝大法科大学の助教授となる
- ◇同大学の政治学政治史講座の初代担任者として、教授に昇格した 1906 年から政治史の講義を担当し、1922 年に新設された外交史講座も兼任している（1927 年からは国際法第 1 講座も担当）
- ◇『外交時報』には 1905 年から 1940 年にかけて合計 96 編を寄稿した
- ◇彼の言説に関しては藤岡健太郎氏の研究があり、さらに松田義男氏が著作目録を作成されている（<http://www1.cts.ne.jp/~ymatsuda/>）が、さらなる分析が期待される

(3) 西沢英一（にしざわ・えいいち）

- ◇ 1892 年生れ。慶応義塾を卒業したあと、時事新報に入り政治部記者となる。1923 年外報部長に抜擢され、1930 年代までその地位にあった。
- ◇ 『外交時報』には 1930 年から寄稿をはじめ、半沢時代の後期から小室時代を代表する常連寄稿者となる（通算 76 編）
- ◇ 次の井村薫雄と並び、戦時期における外交評論家の一類型として興味深いのが、これまでその言説が研究されたことはないと思われる。

(4) 井村薫雄（いむら・しげお）

- ◇ 1891 年生れ。早稲田大学の政経を卒えたあと興亜院の嘱託などを務めた人物。
- ◇ 中国の金融経済を専門とし、『支那社会経済の研究』『列国の対支投資と華僑送金』などの著作がある
- ◇ 『外交時報』に寄せたのも中国関係の論稿が多く 1931 年から 1945 年までに 64 編
- ◇ 西沢などと同じく、先行研究は皆無と推測される

おわりに

- ◇ 各時代の外交政策の背景を構成する「世論」を分析する意味
 - 従来は主要新聞や総合雑誌の分析が中心であったが、今後は『外交時報』のような専門誌に掲載された論説や報道にも、広く目を向けてゆく必要があるのではないかと
- ◇ 『総目次』に関する追加情報
 - ・ 巻頭論文のフルバージョンについて
 - ・ 広田弘毅名義の論文について
 - ・ 本書に関するウェブサイト
 - ① 正誤表や所蔵情報など <http://www.s-ito.jp/gaikojiho/>
 - ② 執筆者一覧・読み方典拠録 <http://www.s-ito.jp/author.html>
 - ・ 本書の全文データ C D の提供について
- ◇ 今後の展望
 - ・ 総目録を活用したアンソロジー（年代別・テーマ別主要論文集）の編纂
 - ・ 『外交時報』自体に関する研究論文集の編纂